

明・景泰帝の諡號について (4)

滝 野 邦 雄

皇太子の復位と太上皇（英宗）への禮遇を願い出た鍾同・章綸・廖莊などに対して、厳しい態度をとるように願い出たものもいた。徐正である。「實錄」の「景泰六年秋七月辛巳（八日）」条に、つぎのようにある。

〔景泰六年秋七月〕辛巳（八日）、刑科給事中の徐正 罪有りて戍邊に謫（追放処分）す。〔徐正 素より愚邪にして學識無し、往往にして人に倩^{たの}みて代りに奏草を具え時政を條陳す。〔それをもって〕掩いて己が能と為し、重用を得んことを^{ねが}う。是れより先、冠帶軍餘の汪祥と謀りて密奏して帝に便殿（皇帝の休憩處）に御して機事（機密事項）を言わんと請う。帝（景泰帝） 亟かに召し入れるに、左右を屏せんことを請い、乃ち「太上皇帝（英宗）臨御して日 久し、威德（聲威と德行）は〔いまだに〕人に在り。沂王^{ひさ} 常しく儲副（皇太子）に位し、天下の臣民の仰戴（尊敬仰慕）する所に在れば、宜しく南宮に居らしむべからず、宜しく封ずる所の地に遷置すべし。〔そうして〕以て人望を絶ち、別に宗室親王の子を選びて、宮中に育せよ」と言う。帝（景泰帝） 之を聞き驚愕し、大いに怒り、〔徐正を指して曰く、「當死、當死」と。即ち叱りて之を出し、命じ調して雲南臨安衛經歷と為す。然れども怒り猶お解けず。其の罪を明正（公開して処罰する）せんと欲す。又た衆を駭すを慮る。乃ち人を遣りて之を伺察（觀察）させるに、〔徐正 淫婦の家を留戀し、久しく行かず。遂に錦衣衛の獄に下す。是に至り復た謫（追放処分）して遼東鐵嶺衛軍に充つ（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』 卷之二百五十六・廢帝郕戾王附錄第七十四・「景泰六年秋七月辛巳（八日）」条）。

景泰六年秋七月八日、刑科給事中の徐正を有罪として戍邊に追放処分にした。そもそも、徐正は、邪惡で學問がなかった。よく人に頼みこんで奏章の草稿を準備してもらい時政について提案した。これを偽って自分の才能とし、重用されることを願った。〔戍邊に謫される〕前、冠帶軍餘の汪祥と謀って景泰帝に密奏して皇帝が休憩される便殿で機密事項を申し上げたいと願い出た。景泰帝はすぐに召しだす。徐正は左右をとざすことを願い、「太上皇帝（英宗）は、長らく天下に君臨され、その威德はまた人々の記憶にあります。沂王が久しく儲副（皇太子）の地位におられ、天下の臣民の尊敬仰慕するところでした。ですから、沂王を南宮に置いておくべきではありません。すでに封ぜられた任地に遷すべきです。そして人々の復活の望みを絶ち、宗室親王の子供を選びだして、〔皇太子の地位につけるために〕宮中で養育なさるべきです」という。景泰帝は、これをお聞きになり、驚き、そしておおいにお怒りになり、徐正を指して「死罪に値する、死罪に値する」とおっしゃった。即刻、叱って退出させ、雲南臨安衛經歷に調（左

遷処分)した。しかし、景泰帝の怒りは収まらず、その罪状を公開して処罰しようとした。だが、人々を驚かすことを考慮した。人をやって徐正を探らせたところ、淫婦の家に恋々として出発していなかった。そこで、錦衣衛の獄に下した。ここにいて、改めて流謫（追放処分）として遼東鐵嶺衛軍とした。

このように「實錄」によると、徐正は、「もとの皇太子（沂王）を任地に赴かせる」・「宗室から新しい皇太子を選びだす」ことを提案したというのである。

陳建の『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』（嘉靖三十四年（一五五五）陳建序）では、つぎのように記される。

〔景泰五年五月¹⁾〕時に給事中の吴江〔出身の〕徐正 密かに便殿（皇帝の休憩處）に御して召見するを請う有り。左右を屏し言う「今日、臣民 上皇（英宗）の復位を望む者有り、〔また〕廢太子沂王の位を嗣ぐを望む者有り。陛下（景泰帝） 慮らざる可からず。宜しく沂王を封ずる所の沂州に出さしめ、南城を増高すること數尺、城邊の高樹を伐去すべし。宮門の鎖も亦た宜しく鐵を灌ぐべし」と。帝（景泰帝） 怒り、〔徐正を〕黜けて雲南衛經歷と爲す。復た淫する所の者^{こいした}を眷い未だ行かず。乃ち鐵嶺衛に謫戍（辺境警備への流罪処分）とす。又た滑縣の人某有りて亦た言う「南城 樹多し、事 巨測（想定できない）なり」と。遂に盡く之を伐る。時に盛夏なり。上皇（英宗） 常に樹に依りて涼息す。樹の伐られ、其の故を得るに及び、懼るること甚だし。復位の後、御史を詔獄に下し、之を杖殺し、〔徐〕正は凌遲の刑を受く（『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十六・景皇帝紀・「甲戌景泰五年五月」条）。

景泰五年五月、江蘇吳江出身の給事中の徐正が、密かに景泰帝に皇帝が休憩される便殿での拜謁を願い出た。徐正は、左右をとざして、「今日、臣民のなかには、太上皇帝（英宗）の復位を望んでいるものがおります。さらに、沂王を皇太子に復位させるよう望むものもおります。陛下（景泰帝）は、ご考慮なさらないといけません。沂王を任地に出発させ、太上皇帝（英宗）

1) 『明史』廖莊傳は、徐正の提案を景泰六年七月辛巳（八日）に掛けている。また、清・夏燮の『明通鑑』の「攷異」では、『明史』が「景泰六年七月辛巳（八日）」に掛けている理由を、つぎのようにのべる。

〔攷異〕徐正の「請問言事〔左右を〕問るを請い言事（機密事項を奏上）す」（『明史』廖莊傳）は、諸書 皆な之を〔景泰〕五年に系ける。之を『明史』廖莊傳に證するに「〔景泰〕六年七月辛巳（八日）、徐正〔左右〕を問つを請い沂王をして國の之の事を言事（機密事項を奏上）す」と言う。傳中 日分を紀す者 絶えて少なし。此に「〔景泰六年七月〕辛巳（八日）」と言うは、蓋し之を「實錄」に本づくなり。今、之に据る（清・同治十二年（一八七三）宜黄刊本『明通鑑』卷二十七・紀二十七・「景帝景泰六年秋七月辛巳（八日）」条「攷異」・四葉）。

夏燮は、『明史』が「實錄」に本づいて「景泰六年秋七月辛巳（八日）」に掛けたと考えている。しかし、すでに検討したように「實錄」を見ると、景泰六年七月辛巳（八日）は、徐正の戍邊に謫（追放処分）する処分が発令された日と理解できる。また、「實錄」を見るかぎりでは、英宗についての提案を行なった当日に、雲南臨安衛經歷への左遷処分を命じ、さらに遼東鐵嶺衛軍への謫戍（辺境警備への流罪処分）に変更がなされたとは理解しにくい。そこからすると、やはり「景泰六年七月辛巳（八日）」以前とするのが妥当ではないだろうか。

のいる南城の塼を数尺高くし、中の樹木を伐採すべきです。そして、南城の宮門の扉のカギに鉄をそそぐべきです」という。景泰帝は怒り、徐正を雲南衛經歷に左遷した。しかし、淫する所の者に恋々として出発しようとしなかった。そこで、鐵嶺衛に謫戍（辺境警備への流罪処分）とした。さらに、滑縣の某が「南城は樹木が多く、不測の事があるかもしれません」といった。とうとう、すべて伐採された。時に、盛夏であり、太上皇帝（英宗）はいつも木の陰で涼んでいた。樹木が伐採され、そのわけを知るに及んで、太上皇帝（英宗）はたいそう懼れた。太上皇帝（英宗）は復辟の後、給事中（滑縣の人某のことか）を獄に下し、杖叩きで殺し、徐正は凌遲の刑に処した、という。

『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』によれば、徐正が行った「もとの皇太子（沂王）を任地に赴かせる」・「塼を数尺高くする」・「樹木を伐採する」・「宮門の扉のカギに鉄をそそぐ」という提案のうち、滑縣の某からも提案された「樹木を伐採する」ということは実行されたようである。ただし、「實録」には、英宗が幽閉されている南城への処置については記されていない。また、「實録」には「宗室から新しい皇太子を選びだす」という提案が記されるが、『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』には言及されていない。

『國權』は、「實録」や『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』など参考にしてつぎのようにいう。

[景泰五年七月] 辛巳（八日）、刑科給事中の呉江[出身の] 徐正 罪有りて鐵嶺衛に戍（辺境守備の流罪処分）す。[徐] 正 素より邪慝（邪惡）にして寡學なり。人に草奏（奏章の起草）を^{たの}請む。嘗て自ら言う己 已に虜を禦ぐの功あり、と²⁾。超拜（特別な昇進）を欲するも得ず。因りて密かに便殿（正殿以外の休憩用の別殿）に對するを請う。人を屏して語けて曰く、「上皇（英宗） 臨御（天下を治める）すること久し、臣民 多く非望（分を超えた希望）有り。[そこで] 沂王を出して國に就かしめ、南宮^{かき}の塼を増し、隣樹を斫り、

- 2) 「已に虜を禦ぐの功あり」に関係するものとして、断定はできないが、「實録」によると、徐正は、つぎのような提案を行なっている。

まず、景泰四年十月戊戌（十五日）に、也先が送ってきた書簡の頭に「大元田盛大可汗」（田盛は、天聖の意味）とあり、末尾に自分で制定した年号を用いて「添元元年」と記されていた（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實録』卷之二百三十四・廢帝郕戾王附録第五十二・「景泰四年冬十月戊戌（十五日）」条による）。

それに対する返書に「大元田盛大可汗」と記すかについての議論が、景泰四年十二月癸巳（十一日）の「實録」に記録され、林聰、安遠侯の柳溥、章綸と並んで徐正のつぎのような発言が載せられている。

刑科給事中の徐正 言う、「當に也先に勅書を賜い、曉すに天命禍福の由を以てし、示すに姦邪成敗の理を以てすべし。如し其の幡然と改悔し復た舊職を稱せば、斯れ固より美と為す。如し稔惡不悛（長期にわたって悪行を悔い改めない）なれば、我は則ち執言（口実とする）討罪（罪を明らかにする）し、戦えば必ず勝ち、攻めれば必ず取らん」と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實録』卷之二百三十六・廢帝郕戾王附録第五十四・「景泰四年十二月癸巳（十一日）」条）。

「大元田盛大可汗」などという僭越な称号をたしなめ、理をもって悟らせ、也先がこれまでの称号に改めれば、それでよいし、改めなければそれを口実とし戦い勝利するのみだ、というのである。

この発言が「己 已に虜を禦ぐの功あり」に関係するものであるかもしれない。

鐵を灌ぎて其の鑰を鑰ぐべし」と。上（景泰帝） 駭きて之を叱り、雲南臨安衛經歷に謫（追放処分）す。〔徐〕正 即かに行かず。妓家に遊びて赴かず。之を錦衣衛の獄に下し、遠戍す（『國權』 卷三十一・「代宗景泰五年七月辛巳（八日）」条・一九九五頁）。

景泰六年秋七月八日、江蘇呉江出身の刑科給事中の徐正を有罪として鐵嶺衛に流罪処分にした。そもそも、徐正は、邪悪で学問がなかった。人に奏章の代作を頼んでいた。かつて自分は虜を防ぐのに功績があったと言った。特進を望みただけでも、認められなかった。そこでひそかに景泰帝に皇帝が休憩される便殿で面会することを願い出た。徐正は左右をとぎすことを願い、「太上皇帝（英宗）は、長らく天下に君臨されており、臣民は過分の望みをいだいております。そこで、沂王を任地に出発させ、太上皇帝（英宗）のいる南城の塼を高くし、隣接する樹木を伐採し、南城の宮門の扉のカギに鉄をそそいで封鎖すべきです」という。景泰帝は、駭いて叱り、雲南臨安衛經歷に謫（追放処分）した。徐正はすぐに出発せず、妓家に遊んでいた。そこで、錦衣衛の獄に下し、さらに遠くの辺境守備への流罪処分にした、という。

談遷（明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕）が『國權』を書いた明末清初になると、英宗の幽閉される南宮の塼を高くし、樹木を伐採し、扉のカギに鉄をそそいで封鎖するという処置が議論された、という陳建の『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』（嘉靖三十四年（一五五五）陳建序）で伝える逸話が定着していたようだ。ただし、すでに検討したように「實錄」には、この処置については記されていない。

なお、清・夏燮は、『明通鑑』の「攷異」において、「疑いを存す」としながらも、「滑縣の人某」を宦官の「高平」ではないかと考えている。

〔攷異〕『明史』 廖莊傳に但だ「徐正 〔左右を〕 問るを請い言事（機密事項を奏上）す」と書するのみ。而して諸書の記す所は、則ち並びに御史の高平の南城の樹木を伐らんことを請うに及び、書して「英宗 復辟し、〔徐〕正・〔高〕平 皆な誅に伏す」と云う。重修『御撰資治通鑑綱目』三編 之に據り、「杖廖莊等」（卷十一・「〔景泰六年〕 八月杖南京大理少卿廖莊於闕下謫為驛丞、復下禮部郎中章綸・御史鍾同於獄、同死綸仍錮獄」条）目中に「高平が南城の樹木を伐採することを願い出て、後に誅に伏したことを」記す。然らば則ち是の時、中より離間するの御史に尙お高平有り。皆な天順の初めを以て誅に伏す。『明史』 廖莊傳と異なれり。今、按ずるに高平の御史と爲るは、史の見ざる所なり。故に『重修御撰資治通鑑綱目』三編の〔この条の〕「質實」に「高平の里籍 未だ詳らかならず」と云う。今、前後を參核（参照して考える）するに、疑うらくは即ち太監の高平なるか。『重修御撰資治通鑑綱目』三編の天順元年五月に書して「柳州千戸の廬忠・太監の高平 誅に伏す」（卷十二）と云う。之を『明史』 宦官傳³⁾に證するに、「上皇（英宗） 阮浪に袋・刀を賜う。〔阮〕浪 以て王瑤に贈る。指揮の廬忠 〔王〕瑤を酔わし之を竊み、以て尙衣監の高平に告ぐ。〔高〕平 校尉の李善をして上變（告発）せしむ」と言う。此れに據れば、則ち阮浪・王瑤を殺すは係れ廬忠と高平の同謀なり。故に天順元年五月に並びに之（廬

忠・高平)を磔するなり。蓋し高平 前の一年に王瑤等を謀殺し、次年に復た南城の樹木を伐るを請う。兩事は實に一人なり。野史 考えず、誤りて徐正に連ねて之を書し、而して以て御史の高平と爲す。『明史』廖莊傳 亦た御史に高平無きを疑う。故に但だ徐正の事を書し、高平を刪卻す。『[重修御撰資治通鑑綱目] 三編』(卷十二・「天順元年五月」条)

但だ「天順元年、盧忠・高平を殺す」の事を書すのみ。亦た未だ詳らかに宦官傳を考えざるなり⁴⁾。今、「徐正言事」下に于いて、並びに「高平 南城の樹木を伐るを請う」事を書し、後年の〔徐〕正・〔高〕平の本を張ると爲す。「御史」と書せず、「太監」と書せざるは、以て疑いを存するを示せばなり(清・同治十二年(一八七三)宜黃刊本『明通鑑』卷二十七・紀二十七・「[景泰六年七月辛巳] 無何、有高平者」条「攷異」・四葉)。

『明史』廖莊傳には「徐正請問言事(正が左右を問^{へだて}ることを願い出て上奏した)」と書くだけである。なのに諸書の記すところは、御史の高平が南城の樹木を伐採することを願い出た、ということまで及んでいる。そして「英宗が復辟して、徐正・高平はみな誅に伏した」と述べる。重修『御撰資治通鑑綱目三編』は、これを根拠に「杖廖莊等」条に、高平が南城の樹木を伐採することを願い出て、後に誅に伏したことを記している。そうならば、この時離間を行なった御史には徐正以外にさらに高平がおり、英宗の復辟後に誅に伏したことになる。『明史』廖莊傳の記載とは異なっている。考えてみるに高平が御史となったということは見当たらない。したがって重修『御撰資治通鑑綱目三編』の「質實」には「高平の里籍 未だ詳らかならず」と

✓ 3) 『明史』(卷三百四・列傳第一百九十二・宦官一)に、

阮浪 景帝(景泰帝)の時に至り、御用監少監と爲る。英宗 南宮に居り、〔阮〕浪 入侍す。〔英宗は阮浪に〕鍍金の繡袋及び鍍金の刀を賜う。〔阮〕浪 以て門下の皇城使の王瑤に贈る。錦衣衛指揮の盧忠は、險人(邪惡な人)なり。〔王〕瑤の袋・刀の常製に異なるを見て、〔王〕瑤を酔わし之を竊み、以て尙衣監の高平に告ぐ。〔高〕平 校尉の李善をして上變(告発)し、〔阮〕浪 上皇(英宗)の命を伝え、袋・刀を以て〔王〕瑤に結び復位を謀る、と言わしむ。景帝(景泰帝) 〔阮〕浪・〔王〕瑤を詔獄に下し、〔盧〕忠 之を證す。〔阮〕浪・〔王〕瑤 皆な磔死するも、詞 終に上皇(英宗)に及ばず。英宗 復辟し、〔盧〕忠及び〔高〕平を磔し、〔阮〕浪に太監を贈る(『明史』卷三百四・列傳第一百九十二・宦官一)。

とある。

さらに、鄭曉(字は窒甫。浙江海鹽の人。弘治十二年〔一四九九〕～嘉靖四十五年〔一五六六〕。嘉靖二年癸未科(一五二三)二甲四十三名の進士)の『今言』に、つぎのようにいう。

九十九

御用左少監の阮浪 英廟の南宮に侍す。〔阮〕浪の下の内官の王堯なる者 蘆溝橋に往きて抽分(船着き場での貨物税徴収)す。〔阮〕浪 南宮(英宗)の賞する所の鍍金の梁扣(ボタン)の綉(刺繡)の茄袋(小袋)・鍍金の結束刀一把を以て〔王〕堯に與う。〔王〕堯 歸り、錦衣指揮の盧忠の家に飲む、蹴毬するに衣を褌ぐ。〔盧〕忠 因りて其の袋・刀の常の制に非ざるを見るに因り、遂に妻をして酒を進め酔わしむ。〔盧〕忠 之を解き、俄にして皇城に入り、衷行太監の高平に白し、以て南宮(英宗) 皇儲を復せんことを謀らんと欲し、〔阮〕浪をして〔王〕堯を遣りて袋・刀を以て〔盧〕忠に賞し、外應を求めんと爲す。〔王〕堯 竟に此れを以て〔阮〕浪の義子の趙縉と皆な凌遲され、没産さる。〔阮〕浪 詔獄に入るに、炮烙煨煉され、苦慘 備え至るも、卒に承せず、獄中に死す。天順の復辟もて、〔高〕平・〔盧〕忠 亦た凌遲さる。〔阮〕浪に本監太監を贈り、命儒臣に命じて撰文して碑を立て、〔阮浪の義子の趙〕縉の子の〔趙〕銳に錦衣試所鎮撫に官す(明・嘉靖四十五年項篤壽刻本『今言』卷之二・「九十九」・一葉)。

する。いま前後関係を勘案してみると、高平は宦官の高平でないと思われる。重修『御撰資治通鑑綱目三編』巻十二・「天順元年五月」条に「柳州千戸の廬忠・太監の高平 誅に伏す」とある。『明史』宦官傳には、「上皇（英宗）が阮浪に袋・刀を下賜した。阮浪は、それを王瑤に贈る。指揮の廬忠が王瑤を酔わし之を竊みだして、尙衣監の高平に告げた。高平は、校尉の李善をして謀反を行なおうとしていると告発させた」とある。これによると、阮浪・王瑤を殺したのは廬忠と高平との謀議のせいである。だから、英宗復辟後の天順元年五月に廬忠・高平を磔にしたのである。おそらく高平は、王瑤を謀殺した翌年に、南城の樹木の伐採を願い出たのである。ふたつの事案は宦官の高平と御史の高平が個々に行ったというのではなく、ひとりの高平の仕業であろう。野史は、そうしたことを考慮せず、御史の徐正の提案に連ねて伐採のことを書き、御史の高平としたのである。『明史』廖莊傳では、御史に任ぜられた高平がいなかったことを疑問視した。だから徐正の事を書しただけで、高平のことを削除したのである。また、重修『御撰資治通鑑綱目三編』は、「天順元年五月」条に「天順元年、廬忠・高平を殺す」ということを記すのみである。また、詳細に『明史』宦官傳を検討していない。いま『明通鑑』巻二十七・紀二十七・「景帝景泰六年秋七月辛巳（八日）、刑科給事中徐正請問言事」条に「南城の樹木を伐るを請う」事を書き、後の徐正・高平を誅することの伏線としておく。「御史」と書かず、また「太監」とも書かないのは、疑問があることを示そうとしたからである、という。

さて、徐正は、英宗が復辟すると、天順元年正月庚寅（九日）到北京に護送される。

〔天順元年正月庚寅（九日）〕錦衣衛千戸の李溶に命じて往きて徐正を檻して京に來らす（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』巻之二百七十四・「天順元年正月庚寅（九日）」条）。

そして、その年の五月丙寅に凌遲の刑に処された。

✓ 4) 重修『御撰資治通鑑綱目三編』巻十二・「天順元年五月」条の「綱」の部分は、

〔天順元年〕五月、柳州千戸廬忠・太監高平伏誅（五月、柳州千戸の廬忠・太監の高平 誅に伏す）。とある。その「目」の部分には、

初め〔廬〕忠 錦衣指揮と為り、南宮太監の阮浪 帝（英宗）の命を傳え、内使（皇帝^①の命令を伝える宦官）の王瑤に結び、復位を圖ると誣告す。〔そこで〕商輅を徴し、帝（英宗）の幾危^①を解く。是（天順元年五月）に及び人を遣りて〔廬〕忠及び〔高〕平を収めて、之を市に磔す。〔高〕平 實に〔廬〕忠と合謀する者なり。

①商輅の「年譜」につぎのようにある。

〔景泰二年〕五月、直證廬忠罪。

○按ずるに〔言行録〕に〔以下のように〕云う。景泰辛未（二年）夏、錦衣衛指揮の廬忠 南宮の事を妄言す。上（景泰帝）怒り、中官の阮浪等を殺し、猶お窮治せんと欲して已まず。公（商輅）と太監の王誠等言う、廬忠は是れ箇の風子なり。如何ぞ聽信して、大體を壊ち、骨肉の情を傷つけん。急ぎ須らく之を止めるを是と為す、と。〔王〕誠等 入りて奏す。後、〔廬〕忠を追問するに果たして真武香火菩薩を供養するが為め、其の通報を得、とす。是に由りて廬忠 妄言を以て誅に伏す。衆 悉く累無し（商振倫編『明三元太傅商文毅公年譜』萬曆四十六年刻本・卷之二・六葉・「〔景泰二年〕辛未、公年三十八歳」条）。

という。

[天順元年五月丙寅(四日)] 遼東鉄嶺衛軍の徐正 誅に伏す。[徐] 正 景泰の時に在りて、刑科給事中と為り、常に密かに召見を便殿に請う。[そして] 左右を屏して言う「宜しく沂王を封ずる所の沂州に置き、出太上皇與俱、以て覬覦する者の心を絶て」と。郕王(景泰帝) 之を聞き憚らず。[徐] 正を出して雲南衛經歷と為す。[徐] 正 復た淫する所の者を^{こいた}京に留まり、即行せず。乃ち遼東に謫戍す。是に至り左右の其の事を上(英宗)に言う者有り。收めて之を鞠するに、具伏(完全に罪を認める)し、謀るに謀反を以てすることをもて凌遲され、仍お其の家を藉没す。軍餘の汪祥 初め[徐] 正と同謀する有り。是に至りて亦た執えて之を斬る(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百七十八・「天順元年五月丙寅(四日)」条)。

天順元年五月丙寅(四日)に、遼東鉄嶺衛軍の徐正が誅に伏した。徐正は、景泰年間に刑科給事中となり、常々ひそかに景泰帝に皇帝が休憩される便殿で面会することを願ひ出た。そして、左右をとどすことを願ひ、「前の皇太子の沂王を任地の沂州に送り、そりに加えて太上皇(英宗)も一緒に出発させて、分を超えた望みを抱く者たちの希望をお絶ちになるように」と言った。郕王(景泰帝)は、これを聞いて快く思わなかった。そこで、徐正を雲南衛經歷に転出させた。ところが、徐正は、寵愛する者に恋々とし、都にとどまり、すぐに出発しなかった。そのため遼東への謫戍処分とされていた。英宗が復辟して、英宗にこうした事情を伝えた者がいた。収監して尋問すると、罪を認め、謀反をはかったことで凌遲に処せられ、其の家産を没収した。軍餘の汪祥もはじめに徐正と謀をはかった。やはりここに至って逮捕して処分した、という。

陳建の『皇明歴朝資治通紀(皇明通紀)』は、つぎのように伝える。

[天順元年三月] 前の給事中・遼東鉄嶺衛軍に謫戍されし徐正を械(拘束したまま)して京に至らし、之を磔誅す。其の景泰中に嘗て離間を行なうを以てなり。[徐] 正 械して至り、引見するの時、悸甚だし、糞溺(糞尿)を出すに皆な青し。人 謂う其れ「驚きて膽を破る」云々と。遂に市に副せらる(『皇明歴朝資治通紀(皇明通紀)』卷之十七・「丁丑天順元年三月」条)。

天順元年三月に前の給事中で遼東鉄嶺衛軍に謫戍処分されている徐正を拘束して北京に送り、磔に処した。景泰年間に景泰帝と英宗との離間工作を行なったためである。徐正は、拘束されたままで引き出された時、非常に恐れおののき、青い糞尿を垂らした。人々は「恐れて胆をつぶした」などといった。とうとう極刑に処せられた、という。

また、いまのところ「實錄」には見出し得ないが、江蘇長洲の黄鑑についても似たよう逸話が伝えられている。蘇州出身の侯甸の『西樵野記』(嘉靖十九年(一五四〇)五月、黄省曾の前序)につぎのようにある、という。

『西樵野記』に[以下のようにいう]。黄鑑は蘇州衛の人。厥の父 善く舞文(法を抜け穴を利用する)もて詞訟を起滅(捏造)し、人の産業を蕩(消耗)さす。害を爲すこと少な

からず。既にして晩に〔黃〕鑑を生む。〔黃〕鑑 弱冠の時、正統壬戌（正統七年壬戌科〔一四四二〕三甲六十八名の進士）の進士に登る。上（英宗） 其の青年美才に因り、近侍に官せしむ。蘇人 咸な曰く「父は刀筆（訴訟）を苦事（粗製濫造）し、子は此の若し。何の天理なるや」と。景泰の間、寵渥（皇帝の恩澤）益ます甚だし。後、駕（英宗）北より還る・南宮に禁錮されてより天順に改元し復位するに及び、舊恩を以て侍し、大理少卿に陞る。朝夕の召見 期（限度）無し。一日、上（英宗） 内閣に御するに、一つの〔題〕本の角の微風もて之を漾^{ただよ}う。命じて取り以て觀るに、乃ち〔黃〕鑑の禁錮を進むる所の者なり。上（英宗） 嘆きて曰く、「意わず〔黃〕鑑の奸の是れ有るをや」と。亟やかに召すに平日より甚だし。〔黃〕鑑 至り、上（英宗） 此の〔題〕本を擲げ之を視す。〔黃〕鑑 萬死を連呼し誅に伏す。遂に滅族に至る（『弇山堂別集』卷二十三・「史乗考誤四」所引⁵⁾の「西樵野記」）。

『西樵野記』につぎのようにある。黃鑑は蘇州衛の人である。その父は法を抜け穴を利用して、訴訟を捏造し、人々の財産を傾けさせた。害をなすことが少なくなかった。そうして晩年に黃鑑を生んだ。黃鑑は、二十歳で正統七年壬戌科〔一四四二〕三甲六十八名の進士となった。英宗は、黃鑑が若く美丈夫であったことから、近侍の役を与えた。黃鑑の出身地の蘇州の人たちは皆な、「父親は訴訟を粗製濫造し、子はこのように恩寵を得ている。どういったことなのだろうか」と言った。景泰帝の時には、さらに恩寵を受けることが甚だしかった。後に英宗が北方からの帰還・宮中で幽閉を経て、天順と改元し復位すると、英宗はもとのように黃鑑を取扱い、大理寺少卿に進め、日々召しだし限りがなかった。一日、英宗は内閣においてになると、偶然に旧疏文の一角が微風で漂っていた。命じて取り、見てみると、黃鑑が英宗を幽閉するように進み出たものであった。英宗は嘆き「黃鑑の奸惡であることがこのようであることを思いもしなかった」という。速やかに黃鑑を召し出すこと、普段よりも急であった。黃鑑に至り、英宗はその疏文を放り投げてみせた。黃鑑は萬死に値します、と連呼し、重罪に伏した、そしてとうとう族滅処分にまでなった。

王世貞（字は元美、号は鳳洲、又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。明・嘉靖五年〔一五二六〕～萬曆十八年〔一五九〇〕。嘉靖二十六年丁未科（一五四七）二甲八十名の進士）は、この『西樵野記』を引用した後、つぎのように述べている。

按ずるに、景泰中、呉江に徐正なる者有りて、兵科給事中と爲る。嘗て上疏して「南城の禁錮」の事を言う。景帝（景泰帝） 之を惡み、外衛經歷に謫（追放処分）す。又た娼妓に戀して行かず、鐵嶺衛に充成さる。太上（英宗） 復辟し、逮されて市に副さる。實に所謂ゆる「黃鑑」と「大理少卿に陞る」とは無きなり（『弇山堂別集』卷二十三・「史乗考

5) 北京圖書館藏明鈔本『西樵野記』（『四庫全書存目叢書』子部・第二四六冊所收）の目録によると、ここで引用される箇所は卷第八の「黃鑑」条と考えられる。ただ残念ながら、北京圖書館藏明鈔本『西樵野記』は、卷第五以下が欠けているので、拙稿では、『弇山堂別集』・『萬曆野獲編』の引用による。

誤四」)。

景泰中、呉江に徐正という人物がおり、兵科給事中となっている。かつて「英宗の禁錮」の事を提案した。景泰帝は、その提案を快く思わず、外衛經歷への謫戍処分にした。なのに娼妓に恋々として出発せず、さらに遠方の鐵嶺衛への謫戍処分にした。英宗が復辟し、逮捕されて、重罪に処された。実際には、「黄鑑」と「大理少卿に陞る」ということはなかったのである、と考える。

そして、おそらく王世貞だと思われるが、つぎのような「徐正傳」を書く。『國朝獻朝錄』所引の「弇州別記」の「徐正傳」には、つぎのようにある。

徐正傳

徐正は呉江の人。故業(家業) 微なり。父 人の爲に刀筆(訴訟文書)・詞訟(訴訟)を治め、不齒(鄙視)さる。而して[徐]正 少きより美貌にして能文なり。人 見て輒ち詫恨して曰く、天 無きや。徐氏の此の兒を生むをや、と。[徐]正 進士に擧げられ、給事中を授けられ、英宗の左右に侍す。上(英宗) 之を愛し、嘗て撫慰して曰く、勉めよや、將に爾を大用せん、と。然れども[徐]正 小人・駟驢(狡猾)もて沾沾(驕慢)たり。稱上さる所以の者亡し。英宗 北狩し、還りて南宮に遜す。[徐]正 密かに疏して曰く、太上皇は社稷の罪人なり。今、過奉するは計に非ずして且つ下[策]なり。或いは借りて奇貨と爲す者有らん。宜しく以て之を處すべし。夫れ「天下を爲むるに家を顧みず」(『史記』項羽本紀)、陛下(景泰帝) 此の名を愛すること母れ、と。帝(景泰帝) 心に之を難しとし、下さず。又た數載し、[徐]正 已に大理少卿に遷る。英宗 復辟し、[徐]正を見て勞^{ねが}いて曰く、卿(徐正) 故より吾(英宗)に侍して給事たらんや、と。日々召對し、金帛酒食を賜うに算うる亡し。而して[徐]正も亦た且に疏の毀たれ發せざるを幸いとなさんとす。會たま英宗 一日便殿(休息處)に坐す。旋風ありて文書を吹き地に墮つ。取りて覽るに乃ち[徐]正の疏なり。帝(英宗) 怒ること甚だし。連發(引き続き)して之を召さしむ。至れば則ち疏を投げ、自ら拾わしむ。[徐]正 魂奪し、嚙^{こた}みて對える能わず。反接(後ろ手に縛り)し、市に凌遲し、其の家を籍す(『國朝獻朝錄』卷之六十八・大理寺・少卿・「徐正」条・六十葉引く「弇州別記」^①の「徐正傳」)。

①いまのところ、王世貞の著作の中にこの「徐正傳」は見いだせない。そこで、『國朝獻朝錄』所引の「徐正傳」を用いる。

徐正は、呉江の人である。家業は卑しく、父親は人のために訴訟の手続きを行ない卑しまれていた。しかし、徐正は若いときから美貌で文章をよくした。人々はそれを見て驚き遺憾として「天 無きや。徐氏の此の兒を生むをや」といった。徐正は進士となり、給事中を授けられて、英宗の左右に侍した。英宗は、徐正を寵愛し、慰撫して「勉めよや、將に爾を大用せん」といった。しかし徐正は小人・狡猾で、驕慢であった。賞賛されるようなものはなかったのである。たまたま英宗が北方に拉致より帰還し、南宮に軟禁されると、密疏を奉り「太上皇(英宗)は社稷の罪人です。いま過奉しているのは、適切ではありません、且つ下策です。或いは太上皇(英

宗)を借りて奇貨とする者がでてくるやもしれません。宜しく処分すべきです。そもそも「天下を爲^{おさ}むるに家を顧みず」(『史記』項羽本紀)といいますが、陛下(景泰帝)「兄の英宗を大切にするという」名を愛おしむことをなさらないでください」と述べた。帝(景泰帝)は心では難しいと思い、手を下さなかった。そして数年して、徐正は大理少卿になった。英宗が復辟し、徐正をねぎらって「そばに仕えてくれるだろうか」という。そして英宗に日々召しだされ、金帛酒食を下賜されること限りがなかった。徐正も自分の以前に提出した疏が廃棄され見つからないことを幸いとしていた。たまたま英宗が宮殿で休息していたところ、旋風が吹き文書が地に墜ちた。拾ってみると、それが徐正の疏であった。英宗は激怒し、引き続いて召し出し、やってきたところに疏文を投げて自分から拾わせた。徐正は胆をつぶし、口をつぐんだままで答えることができなかった。両手を拘束されて、極刑に処せられ、家産を没収された、というのである。

ただ、すでに検討したように、「實錄」によると、英宗復辟後も、徐正は景泰帝に太上皇(英宗)についての提案をしたために遼東への謫戍処分になったままであった。極刑に処せられるにあたって、北京に護送されてきた。復辟後の英宗が徐正を日々召し出し、金帛酒食を下賜したというような記載はない。そして、沈德符(字は景倩、又の字は虎臣、号は景伯・清權堂・敝帚軒・甕汲軒。浙江嘉興の人。明・萬曆六年〔一五七八〕～明・崇禎十五年〔一六四二〕。萬曆四十六年〔一六一八〕の舉人)も、「徐正」と「黄鑑」とを王世貞は混乱してしまっている、と指摘する。

沈德符は、『萬曆野獲編』でつぎのようにいう。

〔景泰間逆黨〕原任給事中の徐正、先ず景泰の時に於いて密見して言事(機密事項を奏上)するを請う。帝(景泰帝)之を許す。乃ち上皇(英宗)及び故の太子、今の沂王ぜらるるを沂州に遷さんことを奏す。帝(景泰帝)憚らず。謫(追放処分)して雲南經歷と爲す。妓に戀して行かず。又た鐵嶺衛軍に謫(追放処分)す。上皇(英宗)復位し。命じて市に凌遲すること三日なり。此れ人の知る所なり。『西樵野記』に又た記すに蘇州衛の人の〔黄〕鑑、其の父舞文(法の盲点をかいくぐり)して、害を爲すこと少からず。晩に〔黄〕鑑を生む。〔黄鑑は〕正統壬戌(正統七年壬戌科〔一四四二〕三甲六十八名の進士)の進士に登る。上(英宗)其の年貌(年齢容貌)の美なるを悦び。官するに近侍を以てす。蘇州の人咸な「天理何くに在りや」と謂う。景泰の間、尤も寵渥(皇帝の恩澤)を被る。英宗の北より還り、南宮より復辟するに及び、舊恩を以て大理寺少卿に進む。召對に虚日無し。一日、上偶々舊章疏の一角を露わす者を見る。取りて之を觀るに乃ち〔黄〕鑑の進む所の本なり。〔それは〕上(英宗)を禁錮するを請う者なり。亟やかに召見し之を擲示す。〔黄〕鑑罪に伏し誅に伏し、遂に滅族さる。弇州(王世貞)之を駁して「其の事(大理寺少卿となったこと)無し」、且つ「其の人(黄鑑)無し」と謂う(『弇山堂別集』卷二十三・「史乘考誤四」)。是の年の「登科録」を査するに及ぶに、則ち果して黄鑑なる

者有り。三甲の進士に登る（正統七年壬戌科〔一四四二〕三甲六十八名の進士）。果して蘇州衛軍籍，長洲學軍生と爲す。登第の時，其の父 尙お在り。徐正と同科の進士（徐正は，正統七年壬戌科〔一四四二〕三甲二十六名の進士）なり。徐〔正〕も亦た蘇の呉江の人なり。乃ち知る是れ科の一榜に二りの逆臣・又た同郡の人を得。亦た異なるかな（萬曆三十四年（一六〇六）自序『萬曆野獲編』卷二十八・果報・「景泰間逆黨」条）。

もとの給事中であった徐正は，先の景泰年間に密かに引見して奏上したいと願い出た。景泰帝はこれを許した。そこで徐正は，上皇（英宗）と故の太子（今の沂王）とを沂州に遷すことを奏した。景泰帝は，喜ばず，徐正を雲南經歷に謫（追放処分）した。ところが，妓女に恋々として出発しなかった。そこでまた鐵嶺衛軍に謫（追放処分）した。上皇（英宗）が復辟し，徐正を三日かけて市に凌遲の刑に処した。侯甸の『西樵野記』によると，蘇州衛の人の黄鑑の父は法を弄んで少くない害を与えており，晩年に黄鑑を生んだ。黄鑑は，正統七年壬戌科〔一四四二〕三甲六十八名の進士となった。英宗はその若く美丈夫であったことを好み，近侍の役を与えた。黄鑑の出身地の蘇州の人たちは皆な，「天理 何くに在りや」と言った。次の景泰帝の時にもっとも恩沢をこうむった。英宗が北方からの帰還・宮中での幽閉を経て復辟すると，旧恩から大理寺少卿に進められ，日々召しだされた。一日，英宗は偶然に旧疏文の一角が露わになっているのを見た。手に取ってみると，黄鑑が英宗を幽閉するように願い出たものであった。速やかに黄鑑を召し出し，疏文を放り投げて示した。そして黄鑑は重罪に伏し，とうとう族滅処分された，という。弇州（王世貞）は，『西樵野記』の記載を否定して，「黄鑑が大理寺少卿となったという事実はなく」，また「黄鑑という人物も存在しなかった」という。ただ，正統七年の「登科録」を調べると，黄鑑という人物がおり，三甲六十八名の進士となっている。そして蘇州衛軍籍，長洲學軍生であった。進士となった時には，その父はなお存命であった。徐正は，この黄鑑と同じ正統七年の進士であり，また蘇州の呉江の人だった。つまり，正統七年の進士にふたりの逆臣で同郷の人を及第させていたのである。また異常なことである，という。

ちなみに，「實録」には徐正の事のみが，とりあげられており，いまのところ黄鑑のことは見当たらない。

付け加えると，清・乾隆『呉江縣志』（卷二十四・科第・五葉）によると，徐正は，字は惟中，正統六年の舉人，正統七年〔一四四二〕壬戌科の進士で，刑科給事中になったと記録される。また，黄鑑は，清・乾隆『長洲縣志』（卷之二十・科目・九葉および二十五葉）によると，字は克明。蘇州衛の籍。正統三年の舉人，正統七年〔一四四二〕壬戌科の進士で，兵部郎中になったと記録される。

ただし，明代に編纂された地方志をみると，明・弘治『呉江志』（卷八・科第）には，徐正の名はない。また，明・隆慶（萬曆二十六年刻）『長洲縣志』（卷六・科第・國朝鄉貢・九葉）には，黄鑑が正統三年に舉人になったとの記録はあるものの，正統七年に進士になったという

記載はない。

ふつう進士はその地域の名誉であり、記録されて当然だと考えられる。なのに清代に編纂された地方志には、二人とも記載されるが、明代編纂のものには進士になった記録が見当たらないのは、朝廷から処罰された官僚の記録は、不名誉なことであるため削除されたのであろうか。また、清代では、前王朝の処罰であるので、かかわりがないとして記載されたのであろうか。

そのように考えることができれば、黄鑑についても、『西樵野記』で言及されるような事実についての記録は、いまのところ見出しえないが、何らかの処分を受けた可能性が考えられる。

さて、談遷は、徐正のこの記事を確認した後につぎのようなコメントを付している。

談遷 曰く、景帝（景泰帝）の徐正を怒るは、同氣を忝^{はずかし}むること無ければなり（兄弟の顔に泥を塗らないようにする：『書經』君牙には「無忝祖考」とある）。然れども其の鑰を^{ふさ}銅ぎ、其の木を伐るに終わる。何ぞ 陽に譴し、陰に之に^あ中つるなり。理 私に勝たず、讒慝の口、微かに其の竇を啓く。之を大にすれば則ち司馬昭の成済を殺す、之に次するは則ち景帝（景泰帝）なり。〔これは〕同一の機（心意）なり（『國榷』卷三十一・「代宗景泰五年七月辛巳」条・一九九五頁）。

景泰帝が、徐正を怒ったのは、兄弟の顔に泥を塗らないようにしたためである。なのに、その幽閉先の宮のカギに鉄をそそいだり、樹木を伐採したりした。それはどうしてか。表では譴責し、裏では迫害している。私情が勝り、奸邪の行いが、口を開けている。こうしたことを大規模にすれば、司馬昭が成済を殺害したことになり、景泰帝の行為がそれに続くのである。

景泰帝が、徐正を処罰したのは兄弟の顔に泥を塗らないようにしたためであるが、実際に英宗に対して行ったことは、陰険である、という。

それに対して趙翼（字は雲崧、号は甌北。江蘇陽湖の人。清・雍正五年〔一七二七〕～嘉慶十九年〔一八一四〕。乾隆二十六年辛巳恩科〔一七六一〕一甲三名の進士）は、『廿二史劄記』において次のようにいう。

景泰帝 初め黄（竑）〔珵〕の言に惑い、英宗の太子の見深を廢して沂王と爲し、己の子の見済を立てて太子と爲す。後、太子 薨じ、未だ嘗て仍お沂王を立てるを欲せざるにあらざるなり。六年七月、給事中の徐正有^{へだて}りて、〔左右を〕問るを請い、「沂王 當に封ずる所の地に遷し、以て人望を絶ち、別に王子を選び之を宮中に育つべし。上皇（英宗）の居る所の南城 宜しく牆垣を增高し、高樹を伐去すべし。宮門の鎖も亦た宜しく鐵を灌ぎ、以て非常に備うべし」と言う。帝（景泰帝）大いに愕き、叱り之を出し、其の罪を正さんと欲するも、衆を駭かすを慮り、遂に之を鐵嶺衛に謫（追放処分）す、と。是れ帝（景泰帝）固より未だ肯て小人の言を聴かざるなり。英宗 復辟するに迫り、徐有貞の輩王文・于謙は外藩を立てんことを謀ると誣^しい、帝（景泰帝）の心事 遂に不白（弁明できなかった）なり、と云う。事は廖莊傳に見ゆ⁶⁾。世 論及する者有ること罕なり。故に特に之を表出す（『廿二史劄記』卷三十四・「景泰帝欲仍立沂王」条）。

景泰帝は、はじめ黄玠の提案に迷わされて、兄の英宗の子で皇太子の見深を廢して沂王とし、自分の子の見済を立てて皇太子とした（景泰三年五月二日）。後（景泰四年十一月十九日）に皇太子が亡くなり、兄の子の元の皇太子の見深（沂王）を復活させたくないとは望んでいなかった。景泰六年七月、給事中の徐正が左右を^{へだて}問るを願い出て、「元の皇太子の見深（沂王）を任地に赴かせ、人々の復活の望みを絶ち、別の王子を選んで、[皇太子候補として] 宮中で養育すべきです。また、上皇（英宗）のいる南城の壁をより高くし、大きくなった樹木を伐採すべきです。さらに、門のカギに鉄を流し込んでおいて、非常事態に備えておくべきです」といった。景泰帝は、たいへん驚き、叱り、その罪状を公開して処罰しようとした。だが、人々を驚かすことを考慮し、鐵嶺衛に謫した、とある。景泰帝は、もともと小人のことに耳を貸さなかったのである。英宗が復辟し、徐有貞などが、王文・于謙は藩王の子を皇太子に立てることを謀ったと誣告し、景泰帝の考えも、冤罪をこうむりすぐことができないものとなってしまったのである。この事は『明史』廖莊傳にある。言及する者が少ないので、特にこのことを述べておく、と趙翼はいうのである。

景泰帝に良心があったために徐正を処罰したと考えるのである。

趙翼よりすこし前の意見であるが、清・乾隆帝は、景泰帝が、徐正を処罰したことについて、つぎのように穿ったこと述べている。

景泰〔帝〕 英宗を蔑視し、并せて其の儲嗣を易う。徐正 奸人を以て窺伺し、遂に公然と沂州に〔英宗の太子の沂王を〕出居するを請う。其の迎合・揣摩（揣摩對方、以相比）殊に「逢君長惡（君に逢（迎合）して惡を^ま長す）」（『孟子』告子下に「長君之惡其罪小、逢君之惡其罪大（君の惡を^ま長すは其の罪 小なり。君の惡に逢（迎合）するは其の罪 大なり）」と爲す。景泰〔帝〕 廖莊等の建言に于いて既に嚴刑とす。以て高平の伐樹の説を復用するを遅くす。其の猜忌・險刻（陰險） 幾んど餘地を留めざるなり。何ぞ獨り徐正に于いて反って加うるに深讎を以てするや。蓋し南宮の退處の朝謁（入朝謁見）闕如（缺

✓ 6) 『明史』に、つぎのようにある。

……初め景帝の時、英宗 南宮に在りて、左右 離間（隔離）す。〔景泰帝の子の〕懷憲太子 薨じ、羣小 沂王の復た立たんことを恐れ、讒構（讒言） 愈々甚だし。故に鍾同・章綸と〔廖〕 莊と相繼ぎて力言（懇言に申し立てる）し、皆な罪を得。然れども帝（景泰帝） 頗る感悟す。六年七月、刑科給事中の徐正 〔左右を〕^{へだて}問るを請いて言事（機密事項を奏上）す。亟かに召し入り、乃ち言う、「上皇 臨御し歳久し、沂王 嘗て儲副（皇太子）に位し、天下の臣民 仰ぎ載す。〔そこで〕宜しく封ずる所の地に遷置し、以て人望を絶ち、別に親王の子を選び之を宮中に育つべし」と。帝（景泰帝） 驚愕し、立ちどころに之を叱り出し、其の罪を正さんと欲す。〔しかし〕衆を駭かすを慮り、乃ち遠任に謫（追放処分）するを命ず。而るに帝（景泰帝）の怒り未だ解けず。已にして、復た其の淫穢（下賤）の事を得、鐵嶺衛に謫戌す。蓋し帝（景泰帝）〔鍾〕 同等の言う所は過激なりと怒ると雖も、小人の言は亦た未だ遽かに聴かざるなり。英宗 復辟するに迫り、于謙・王文は外藩を立てんことを謀るを以て誅死し、其の事 遂に不白（弁明できなかつた）なり、云う（『明史』卷一百六十二・列傳第五十・「廖莊」）。

少；沒有）たりてより，其の勢い 禁錮に殊なる無し。景泰〔帝〕の心を推すに，以爲らく近きこと闕廷（朝廷）に在れば，防制（防備和控制）に易し，若し出でて外藩に就けば，則ち舊主の名 存し，衆望 未だ絶たず，意外の虞（憂慮）無きこと能わず。〔そのため〕深く〔徐〕正の詭辭を以て説を爲すを疑う。故に一たび言を聞き，即ち驚愕に勝えず，且つ之に繼ぐに怒りを以てするなり。論者 毎に〔徐〕正の謫戍を以て「景泰〔帝〕の貪位忘君の罪を減ず可し」と謂う，又た或いは「其れ此れに藉りて以て掩惡沽名（名譽を得ようとする）」と謂う。〔しかし〕景泰〔帝〕の位を襲いて以後，久しく已に倒行逆施（常軌に違反する：『史記』伍子胥列傳にもとづく）なるを知らず。本より未だ人言（他人の評判）を顧惜（愛惜）せず。安んぞ天良（良心）を得んや。忽ち動くも必ず統あり。前後を觀て以て其の心を誅せば，始めより遁情（隱情）無きのみ（『御批歷代通鑑輯覽』卷一百四・「景泰六年八月，杖南京大理少卿廖莊於闕下，謫爲驛丞。復杖禮部郎中章綸・御史鍾同於獄。〔鍾〕同死，〔章〕綸仍錮獄」条の批文）。

景泰帝は，英宗を蔑視し，その皇太子も自分の子供に取り換えてしまった。徐正は奸人の心根からそれを窺い，とうとう公然と英宗の太子の沂王を任地に出発させるように願い出た。その阿諛追従は，ことに「君主に迎合し，その過ちを増大させる」ものである。景泰帝は，廖莊などの英宗の皇太子の復位についての提案には，嚴刑をもって処罰した。そして，英宗の幽閉先の樹木の伐採についての高平の提案は，用いたのである。その猜疑陰險なことは，余地を留めないものである。どうして，徐正についてのみ譴責を行なったのであろうか。おそらく，南宮の隱居処での拝謁は出来なくなったことは，その勢い禁錮と異なるものではない。景泰帝の気持ち察するに，英宗を朝廷内においておけば，制御しやすい。一旦外に出してしまえば，もとの皇帝の名目があり，衆望も完全になくなったというわけではないので，思わぬ憂慮すべきことが起こらないともいえない。そのため，徐正が英宗を外に連れ出すことを考え，詭弁を弄しているのではないかと疑ったのであろう。だから，提案を聞き，驚愕してしまい，つづいて怒りが込み上げてきたのである。評論する者たちは，この徐正を謫戍処分にしたことから，「景泰〔帝〕の皇位に汲々として兄の上皇をないがしろにしたという罪は減すべきである」とのべる。また「この処分を行ない，惡名を覆い隠して名譽を得たいと考えた」という。しかし，景泰帝が即位してから，常軌に違反してきたことを知らず，もとより，他人の批判など考慮などしていない。どうして良心があるといえるのか。突然の行動にも，必ず筋道が通っているものである。前後のみを見て其の心情を責めるのならば，始めから隠された心情など無いようなものである，という。

徐正の提案は，英宗のためのものだと言ふと景泰帝は推測し激怒したという。したがって，景泰帝の英宗への処置は一貫している，というのである。

（つづく）